

ジョン・ロック(1632~1704)

ピューリタン革命から名誉革命に至る時代を生きた、イングランドの思想家。『統治二論』は、アメリカの独立と憲法制定に大きな影響を与えた。

完訳
統治二論
ジョン・ロック 著
加藤 節 訳



イギリス社会が新興の中産階級の手で近代社会へと脱皮してゆくとき、その政治思想を代表したのがロック(1632-1704)であった。王権神授説を否定し、政治権力の起源を人びとの合意=社会契約によるとした本書は、アメリカ独立宣言の原理的核心理念となり、フランス革命にも影響を与えた。政治学史上屈指の古典の全訳。

白 7.7
岩波文庫

寛容についての手紙
ジョン・ロック 著
加藤 節・李 静和 訳



迫害、拷問、殺戮が、宗教の名によって横行した十七世紀ヨーロッパ。信仰を異にする人びとへの「寛容」はなぜ護られるべきなのか? 本書は、この疑問に対するロックの到達点。政治と宗教との役割を峻別し、現世の利益を守るのは為政者の任務だが、魂の救済は宗教に委ねられると説く。後世に多大な影響を与えた政教分離論の原典。

白 7.8
岩波文庫

適切な治安立法に基づき、公共の安全を守らなければならない

副島嘉和・井上博明 「これが統一教会の『秘部』だ」

(『文藝春秋』1984年7月)

- ・統一教会の宣伝紙であった『世界日報』が、一般紙に脱皮しようとしたことから、教団側と意見が対立。教団は世界日報本社ビルを占拠し、副島氏を編集長から解任。
- ・韓国、日本、中国という東洋の三国のなかで、イエスは韓国に再臨する。韓民族は「第三イスラエル選民」であり、今後の世界は韓国を中心として統一される。これに対して、天照大神を崇拜し全体主義化した日本、共産主義に染まった中国は、「サタン側の国家」である。
- ・日本は「エバ国家」として、韓国(アダム国家)に服従・奉仕しなければならない。

「ヴァジラヤーナの一群」に関する試論

——オウム真理教の隠された教団構造について (ver.1.41)

大田俊寛

1. 死刑執行後に明らかになった女性信者殺害事件

事件公表の経緯

2018年7月6日と26日の両日、オウム真理教の教祖であった麻原彰晃氏を始め、一連の事件に関与した一三名の死刑が執行された。これに対する日本社会の反応には、賛意と非難の双方が見られたが、全体としては、肯定的に受け止めるものが大勢を占めていたように思う。他方、2011年に『オウム真理教の精神史——ロマン主義・全体主義・原理主義』（春秋社）という書物を公刊して以降、元オウム信者との対話や宗教学者の責任問題に関与し続けてきた私にとって、当時の心境は、「複雑」という以外に表現しようのないものであった。短期の一斉処刑を肯定的に感じる気持ちにはまったくならなかったが、オウム問題を終結に向かわせるためには、苦しくとも避けられないステップとして受け止めていた。

ところが、オウム問題はその後、順調に終結に向かうというわけにはゆかなかった。死刑執行によって最後の足枷を解かれたかのように、それまでは知られていなかったさまざまな事実が明らかにされたからである。なかでも、信者の一人であった吉田英子氏が教団内で殺害されていたという事実が公表されたことについては、私自身も大きな衝撃を受けた。

ところが、オウム問題はその後、順調に終結に向かうというわけにはゆかなかった。死刑執行によって最後の足枷を解かれたかのように、それまでは知られていなかったさまざまな事実が明らかにされたからである。なかでも、信者の一人であった吉田英子氏が教団内で殺害されていたという事実が公表されたことについては、私自身も大きな衝撃を受けた。

「上祐がひた隠し、警察も知らない」麻原の女性信者殺害事件

「オウム」の内幕、麻原彰晃の死後、オウム真理教の教団構造が明らかになった。女性信者殺害事件の真相が明らかになった。麻原彰晃の死後、オウム真理教の教団構造が明らかになった。女性信者殺害事件の真相が明らかになった。



「オウム」の内幕、麻原彰晃の死後、オウム真理教の教団構造が明らかになった。女性信者殺害事件の真相が明らかになった。麻原彰晃の死後、オウム真理教の教団構造が明らかになった。女性信者殺害事件の真相が明らかになった。

二十歳からの20年間

20 years from twenty years old

「オウムの青春」の現場を越えて

Across the tempestuous phase of the youth of the Aum

宗形真紀子

Maki Manakata



苦しみを
作ったのは私、
苦しみから
抜け出す
のも私。

自らの精神を、
深く向き合った
心性ノラッシュ

だれの20年間にも、
消せない傷と
価値がある

三五冊 定価未定 五〇〇円税別

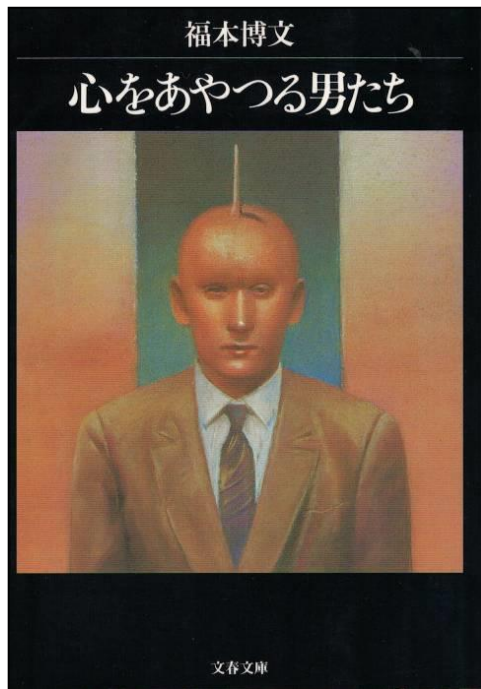
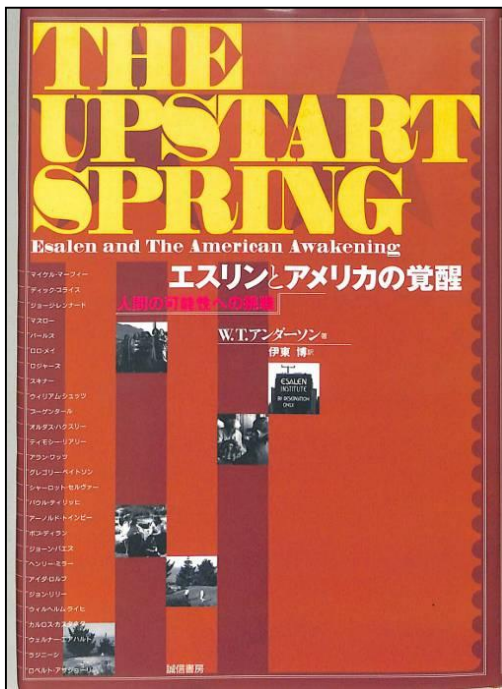
・オウム事件で立件された殺人の被害者数は28名

→ その他、約30名の死因不明者・行方不明者が教団内に存在

公安調査庁による観察の問題点

- ・アレフ、山田らの集団の実態が不明
- ・ひかりの輪がアレフと同一団体であり、

「麻原隠し」を行っている」と主張しているが、事実誤認



- ・もし本当に、「他者の精神を科学的に操作・支配する」ことが可能であるとすれば、近代の原理である個人の「自由」「自律」という考え方は完全に崩壊。
→ 実際には、そのような科学的技術は明確には存在しない
- ・「マインド・コントロール」という疑似科学的・反近代的概念に依拠して「カルト」を特定・攻撃すると、それ自体が「人権侵害」になる可能性が高い。
→ 「反カルト」の「カルト化」という奇妙な事態



エーリッヒ・フロム (1900～1980)

ユダヤ系の精神分析学者、社会心理学者。

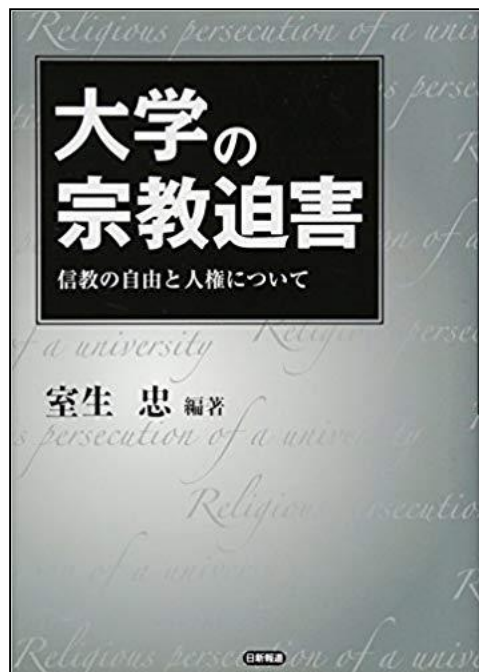
1900年ドイツに生まれるも、ナチスから迫害を受け、
1933年にアメリカに亡命。



実験社会心理学を厳しく批判。

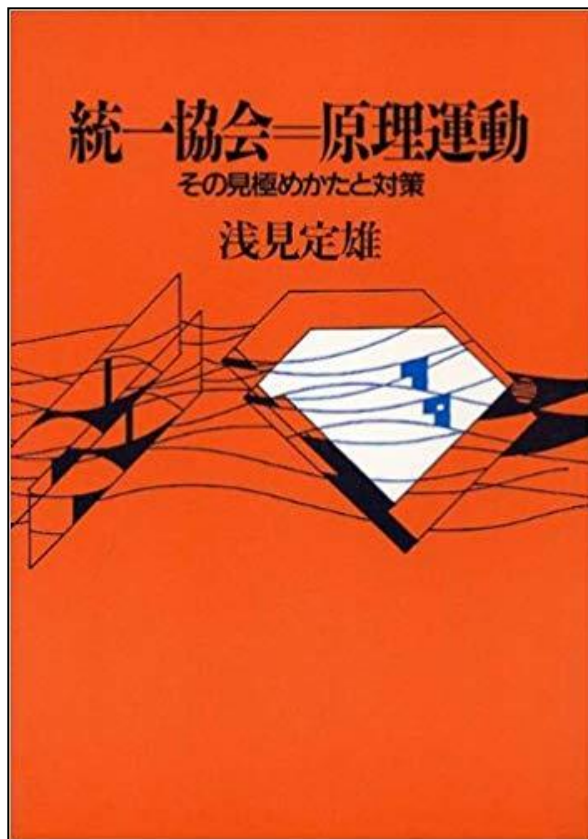
「ミルグラムの実験では、被験者は偽りの情報を与えられ、嘘をつかれている。(ジンバルドの) 刑務所の実験では、すべてが実験にすぎないという意識を失わせるように仕組まれていた。こうした状況下では、参加者の現実感覚は混乱し、彼らの批判的判断力は低下してしまう。」

統一教会員への拉致監禁に関する書物



- ・40年以上にわたり、4000人以上の統一教会員が拉致監禁された。
- ・監禁は、通常で数週間から数ヶ月間、長い場合には12年に及んだこともある。
- ・監禁のショックによって多くの人々がPTSDを発症し、自殺するケースも。
- ・大学の研究室では、統一教会員の学生の受け入れを拒否するということが起こった。

浅見定雄『統一協会＝原理運動』（1987年）



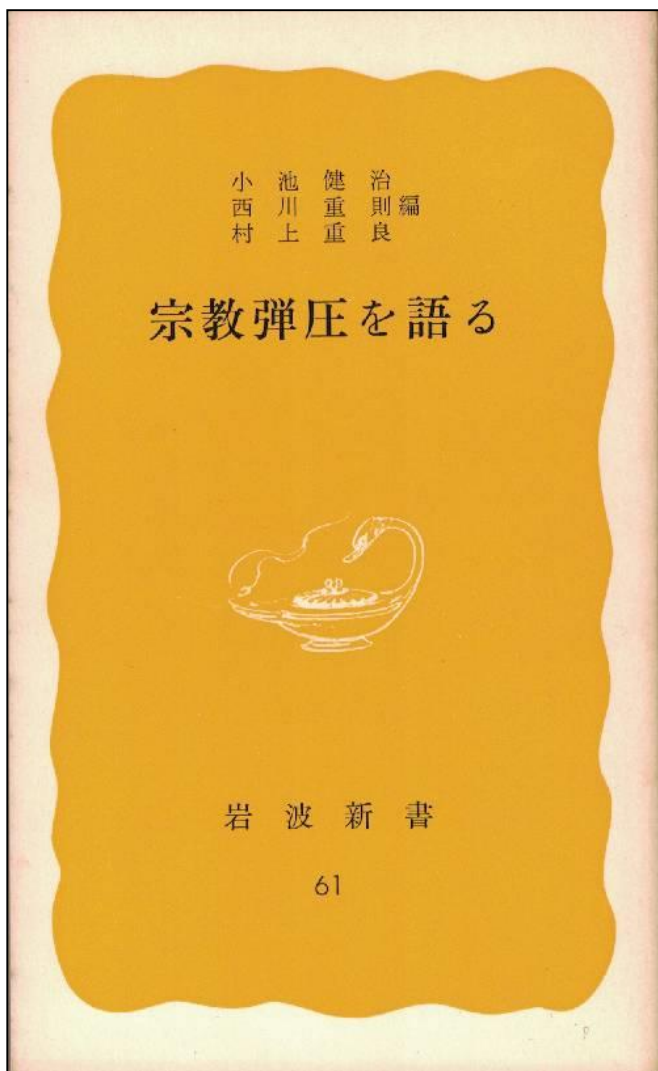
「最後に、統一協会を崩壊させるもうひとつの道がある。それは(中略)日本中がこの集団についてもっともっと知って、もっともっと世論を高め、彼らが日本社会に居られなくすることである。彼らをおだてたり庇護したりしている一部の「学者・文化人」や政治勢力が、「これ以上関係を続けるとかえって自分たちの信用に傷がつく」と思うようにまですることである。統一協会とは、所詮「勝共」を売り物にした社会への寄生虫である。寄生する主に見捨てられれば必ずその社会からは退散する。」

(223～4頁)

→ 保護説得とメディア・バッシング(悪評戦術)が、「カルト対策」の基調に。

オウム真理教への対応に存在した問題点

- (1)「オウム真理教の狂気」というバッシング姿勢で報道が始まったこと
→ その後、冷静な対話を行うことが著しく困難に
- (2)信教の自由の否定・強制棄教を、一足飛びに口にしたこと
→ 合法的にそれを行うためには、国家的合意が必要であったはず
- (3)公安との連携が取れていなかったこと
→ 坂本弁護士が所属していた横浜法律事務所は、国鉄労組問題、共産党幹部宅盗聴事件に関わり、公安と対立していた



- ・元オウム信者を執拗に監視し続ける
- ・協力者工作によって団体の活動を混乱させる